

第四章 武田学長の教師論について

1 女教師として

武田学長の教師論は具体的には女教師論である。しかし男性対女性という対比のもとでの女教師論ではなくて、母親がわが子を育てるような「人間性の本質」に基づいた教師論である。

人間が他の動物・鳥獣と根本的に異っている性能（本質）は、言語活動に由来する思考能力（評価・判断・自省）と自己を覚知できる自己意識 *self-consciousness* とにある。それに引き換え、鳥獣は本能的な思考活動に支えられて生活しているが故に、生んだ子については本能的に一所懸命に哺育するが、子が自立能力を身につけ巣立ちしてしまうと、親は子を忘れ、子は親から離別して親を失ない、唯一の集団のなかで独立無縁な弱肉強食の生活に入ってしまう。

しかし、人の子は長い間、親との共同生活を通して言語を学び、人間の生活習慣を身につけ、さらに善悪の価値判断について教えられ、様々な概念と生活手段を獲得してゆく。即ち、人間による人間の

教育を享受することによって、人生の喜びと悲しみを知ることができるようになる。人間の親子関係は、唯それだけに終るのではなく、人類が長い間に培い形成してきた過去と現在にわたる世界観の多様な存在形式（文化ないし文化財）について、主として子どもが直観的にこれを理解し知るようになって、家や国家に内在する伝統的な慣習と価値・人倫の存在などの真理をも弁えるようになってくる。

人間による人間の教育

インドで狼に育てられたアマラとカマラは野生のまま人間に発見されキリスト教会で牧師に育てられたが、既に人間形成の臨界期を過ぎてから（即ち狼の知覚や思考の生活様式を身につけたままで）言語教育や人間生活様式を与えられたため、それらの人間学習をすることが甚だ困難であり、人間生活を営んで生きてゆくことができず、二人とも10歳代で死んでしまった。

人間は人間に育てられて初めて人間になることができるのであって、人間はただ食べ物を与えられる動物たちと同様な飼育だけで、一羽の鶏のように籠のなかで孤独に、あるいは獅子のように檻のなかで一匹だけで生きることができないのである。動物の場合は、食べることに必要な最小限のコミュニケーション（第一信号系）だけでも生きてゆけるが、人間の場合は出生直後から十年以上も長い間にわたって先ず言葉の教育を直接母親から愛情のこもった口移しの教えを受けてこそ、子どもは安定した心理状態のもとで（脅威にさらされることのない条件や状態のもとで）はじめて同化 *assimilation* し、子ども

もがもつ可能性としての調節の機能を最大限に發揮し、ピアジェの發生的認識論のように、新しいシエマとしてのシンボルと言語とイメージを吸収し、それによって人間性の諸条件を獲得してゆくのである。

愛情と熱意に溢れた教師

このような人間の親子関係において、子どもは親から与えられるひたむきな愛と誠が何であり、それが何を意味しているかに気づき、それを反芻しながら身につけていったものが人間性であって、決して動物や動物的なものの養育からは現われることのできないものである。人間はこれを恩義として生涯忘れることのない因縁と考え、さらには先祖代々への崇敬の念となつて手を合せて拝む気持が、祭祀という行為と行事を親から引き継ぎ、一つの宗教的な信念を形成してゆくのである。

武田学長の身辺にもこのような仏教的信仰があり、毎年開学記念日には全学的行事の一環として、先づ旧教職員の慰霊と感謝の仏事が行われていることを学生も周知している。学長は自然・神仏・故人への謙虚な感謝の念を自ら具現されながら、それ以上の宗教色は私学教育には摂取されないので、人として弁えるべき感謝と謙虚さの気持を自然態として特に女性に求められている。それは建学の精神に則つて打ち樹てられてきた教育方針のなかにも重要な項目として掲げられており、自由気儘と自己主張の激しい現代社会が形成されつつあるとき、常に人間本来の姿を自省し、「素直で優しくて慎みのある礼儀正しい奥ゆかしい品位」に溢れた女性的生活態度が、わが子に対し人に対して真の意味での愛を行使する

ことができるという信念となって表現されている。エロスも必要であるが、それを前後左右も弁えず優先させ人倫を踏みはずすものが絶えない現代社会においてこそ、アガペ的人類愛の^{ほろほろ}迸りが教育の源泉なのである。

武田学長が『教育実習生へ』と題する一枚の要請文(プリント)のなかで、^レ教育者としての心構えの項を掲げ、「まず右の教育の意義を十分理解し、自覚して希望とよろこびをもって臨むことである。(中略)……与えられた時間だけ指導しておけばよいのだ、といったような考え方や態度であつたとしたら、児童はその態度に満足できるかどうかということである。『何とか立派に成長させたい、どうか立派に成長して欲しい。』それには一つ一つの指導の中に、これだけはわかつてほしい。わからせたいと願う情熱、愛情がなければならぬ。こうした愛情、熱意のこもった教師の態度には、自然児童も引きこまれてくる。すなわち、教育には愛と熱意と努力、根気がなくてはならぬのである。」と説いているのは、上述のような人間が具有する本来の人間性の奔流に支えられた教育活動を行う教師が要請されていることを述べたものである。

教師は先憂後歡の人である

教師は男女を問わず多くの若者のあこがれの職業である。それは未発達な児童の前に立って知識や技能を授け、教え、諭すカッコイイ商売であると思われているからであろう。しかし学校教師に対する父

兄や保護者の様ざまな一般的意見 statement にも見られるように、「教師は単なる知識の切り売りであつてはならない」という意見や「教師は口先だけの商売である」あるいは「教師は口論にすぎない」などの批判は、とかく現実の社会から隔離され一国の城主あまじになつたような雰囲気の中かで晴がましい表舞台に立つて主役を演じ自己満足と優越感を享受できる仕事であり、労働条件の保証された職業という表面的理由のみで教師を論じることとはできないという厳しい社会の目があるためである。

その一方で、教師も労働者であるという労働意識や労働運動を前面に打ち出し、教育活動を二の次に考えているとしか思われないような一群の教師集団があつて、子どもの教育よりも教師の生活を第一義に考え、適正な労働条件・生活保障が得られなければ、正常な教育はできないと主張することも確かに一面の真理をもっている。

しかし、自然に逆る人間性から人情的に見た場合、例えば留守番していた子どもの火遊びから火災を起こしている家を、買物から帰宅してきた母親が目の辺りにして防火衣服が無いから子どもは助けられない、親も火災で焼死するのが落ちだとうそぶいて、隣家や消防機関に連絡する余裕のない場合でも、わが身の安全が先だと叫んでいただけで事態が解決するであろうか。わが身を構わず火中に飛び込んで子どもを助け出そうとする愛と純情は単に盲目的であるとの批判だけでは済されない。この論議は、先ず火災を発生させないような予防的な注意と指導が本質的な問題であることは論を俟たない。

事態がそれ程急迫していなくとも、目前の子どもの教育に対し、それを信託されている教師として、

先ずその義務を果して初めてそれに見合った報酬が与えられて然るべきで、教師は何にも優先して義務教育に責任と熱意と愛情を注ぐべきだという論だけでは、頭脳労働者にたいする人権無視だと言えないこともない。

双方の論にはそれぞれ正当な理由があり、価値観の相異と言つてしまえばそれまでだが、現実問題として（現に価値観の多様化した時代において）両者の見解と要求を同時に解決することは、利害の対立があり甚だ困難なように思われる。けれども数世紀にわたつて正反合の哲学的止揚の限りない努力が積み重ねられてきているのも事実であるし、終局的な妥協点を見出そうとする歩み寄りの姿勢も大切なことであるということに気付かれてきて、今こそ盛んな対話と論議による相互理解が殊に教育界において必要なように思われる。

人間の社会には秩序があり、物事には順序がある。これは生物全体を含めて自然界の重要な基本原理である。「天行健」という東洋の世界観では、天すなわち自然が順序正しい法則に従つて動く限り、凡ての存在は健やかであり、安穩な日が続き、人間を含めて生物も成長し繁榮するという見方である。過去の相対的価値観を排除して、二一世紀の文明社会にふさわしい新しい価値観を今において創造しなければ、未来は明るく開けてこないであろう。末世観は何時の時代でも存在したが、驚天動地の秩序が忽然と現われてくることも無かつたし、今後も価値の秩序逆転の可能性はヒューマニズムを見失わない限り発生するとは考えられない。神の創造は無から有が生まれるかも知れないが、人間の創造は有から

変形有が造られてゆくに過ぎないように思われる。

したがって秩序を無視した創造は夢であり、さもなければ無秩序の騒乱状態になるだけであろう。世界の秩序は永い歴史と伝統のなかでその本質が形成されて、時勢に依じて伝統に基づく人類のコンセンサスのなかから精せい「改善」への努力が賽の河原の石積みのように延延と続けられていくと思われる。

筆者も再度訪れたことがあるが、松尾芭蕉の奥の細道行脚の一徳として（陸奥の国）市川村多賀城の壺の碑に佇み、「むかしよりよみ置ける歌枕、おほく語伝ふといえども、山崩、川流れて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代変じて、其の跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念。今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、き旅の労をわすれて、泪も落るばかり也」（振仮名筆者）と人間を含めた自然界において変るものと変らぬものを観じ、存在の本質を見極めた感動を記している。

このような伝統の深さとその意義を覚知するならば、厳密な意味での革命は存在し得ないのではない。しかるに今日の社会は、われ先にと一方の主義理論を主張し、他を否定しないまでも、民主主義だ、生活保障だ、個人尊重だなどとわが田に水を引くだけの争いになって他を省みないのは、真理ではなく、正当性にもつながらない。精せい湾岸戦争が落ちであろうし心的物的損失は計り知れない。

この意味で伝統の重視は必要であるから、武田学長が女子教育を始めるに際し建学の動機を「敗戦後の日本は欧米の新思想が急激に流入し、日本古来の伝統的精神や徳性は見失われ、日本女性の最も美徳

とする謙虚、優雅、芯の強さ、はどこにか置き去られ、民主主義の本義を忘れた利己中心主義、享楽主義に走り道徳は地に落ち、社会は混乱の極に達していた現状を目撃した私は『これではならぬ』と強く感じ、国興亡の根幹となる女性の教育こそ急務であると考へて、一方では日本古来の伝統を究明伝承しながら、他方では人間性に立脚した民主主義の理念を追究し実現する新しい日本女性の育成のための教育を目標とした教育者、教師を求め続けているのである。

教育の目標は社会化 socialization と個性化 individualization の両面を持っているが、人間形成においてこのいずれの面が優先するかは難かしい。けれども、乳幼児の個性化が重要であるとして人造りを考えるのは、ナンセンスであろう。人は生れてきて先ず生活環境に順応し習得しなければならぬのは、狼少年の例でも見てきたように、言語学習という社会化優先が順序であり、十分な社会化に伴う基礎基本が獲得されてはじめて、豊かな個性化の教育が期待できることに思いを致すと、目前の子どものちの無秩序な生活態度に先ず憂いをかけ、これの健全な育成に苦勞をし愛情を注いでゆかねばならない。これが教師の具備すべき必要な教育愛であって、少々の金銭では替え難い人間愛の形成をおたがいに終局的に体験的に獲得してゆくその歓びを、結果として観ることのできるのが教師冥利に盡きると言うものであろう。

2 女性としての技を身につける

一芸に秀でる

「芸は身を助ける」という俚諺がある。そして「一芸に秀でる」という表現は、現代的には専門性を獲得することを意味しており、専門とする技術乃至知識によって自己を実現し社会に貢献することができることを表わしている。

武田学長はその90年の人生体験のなかから生まれた資格試験の労苦と意義と重要性についての見解を話され、それを直接聞いたこともある。

そして、わが大学の沿革からも、その一端を窺うことができる。

戦後の太田川畔の一地域での地道な技術専門学校の創立から幾多の苦難を乗り越えて、潑刺として共に学芸にいそしんだ青春の乙女の修業のなかで、明るく元気に成長してゆく姿を求めて、日夜学長のもとで先輩教職員とともに営々と学園を築き続け、やがて家政系の短期大学として充実してきたのである。そして文科系（国文・英文）の四年制大学を併設展開し、一九七八年からは初等教育学科が増設され、それらの学科の充実のうえに一九八六年からは女性の生涯教育を目指して大学院文学研究科も認可設置されてきた。もちろんその間に短期大学部も6学科に拡大され、教員免許状をはじめ栄養士資格の付与

べきものであって、女子教育Ⅱ人間教育に欠くことのできない領域であり目標であるとするのが、武田学長の私学教育に対する信念のように思われる。

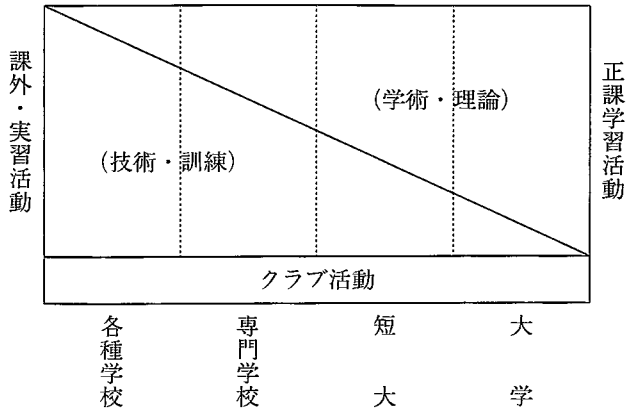


図1 課外実習およびクラブ活動

と同時に最近では幼稚園教諭、保母、司書・社会教育主事などの資格交付が行われ、さらに希望者を対象とした英会話能力検定、ワープロ検定による資格証明も受けられるようになってきている。

加えて、正課ないし準正課の教育課程の充実への不断の努力は勿論のこと、課外活動ないしクラブ活動の多様な展開もまたわが大学の大きな特色である。正課はそれぞれの専門の学術の究明と修得に主たる教育目的を持っているが、課外活動の自主的展開には、幅広い人間形成にその目的の主眼がおかれている。則ち武田学長が繰返し強調されているようにクラブ活動による協調・切磋琢磨・信頼と責任の醸成・行学共感の体得は、人間教育の重要な目標である。今日の大学教育が未だに知識・技術の偏重から脱し切れぬ状態のなかにおいて、上述のような人間教育の重視は、教師養成の中核となる

人間形成としての課外活動

今日でもドイツにおけるマイスター制度は、厳しくその伝統が継承されており、それによって蓄積された技術水準のノウハウが維持されてきている。わが国においては、茶華道をはじめ武道・弓道・書道なども技と心の両面にわたって伝統的な資格免許制度が確立維持されてきている。一方でそれらの多くは能や舞踊を含めて家元制度が存続し、他方、文部省の通信教育資格認定制度と認定講座によって生涯教育の一環として、公民館活動としても学校のクラブ活動としても隆盛を極めているのは、世界に類例のない日本の社会（生涯）教育の特徴である。

高等教育の変遷と教員養成

わが国の教員養成は、戦前において師範教育・師範学校という名称のもとに旧制専門学校として位置づけられていた。職業に貴践はないが、武田学長には人間を教育する職業という意味での聖職意識が見られる。

戦後の新教育制度になって、教員養成制度は名実ともに大学レベルに格上げされると同時に、西洋教育史的な七つの自由科 *seven liberal arts* の思想に基づいて学芸大学ないし学芸学部として発足した。さらに教員免許法の改正とともに教育制度・行政の重視から三たび教育大学ないし教育学部と改称された。二十世紀の日本の教育改革は、師範学校から学芸大学を経て教育大学へと変革され、教員免許法の

開放制とともに、さらに全国的に教員大学院（修士課程）大学の設置充実を見て、免許法の改正が重ねられ、今日、一般教育の見直しと教育課程の大綱化の試行がなされつつある。

武田学長の教師論は、若くして義務教育現場に携わり、戦時下の教育行政を推進し、時代の変遷に伴う教育と教師像の変貌を実践的体験の結果、それに基づいて生れた教育理論であり教師論なのである。

先に引用した武田学長の『教育実習生へ』という文書のなかで、「忘れてならないことは、相手（児童）の人権を尊重することである。すなわち、相手は自分と同じ人間である。人と人とはお互いに人格を尊重し合うことが大切である。しかし、指導の立場にあることも忘れてはならぬ。児童の横道や、本能を満足するための自由や、わがままを見のがして間違つた人間にならぬよう寛厳よろしきを得た指導が大切である。」と人格の尊重を指摘しつつ、真の責任性と自覚をもつた人格形成と陶冶の必要性を強調している。経験の乏しい児童の人格を、ただ機械的に尊重するだけでは、わがままな自己中心の人間を造るだけである。自省の能力を伸長し責任を果せる人格になつてこそ尊重されるべきであつて、単に教師が小賢しい言動を弄し態度・意見が豹変する君子（指導者）は軽べつ無視されなければ、人道は地に落ち信頼関係は失われてゆくのである。

「要するに教育は形式的なお説教や、知識の詰め込みであつてはならない。情操を忘すれた教師が教壇からどれだけ立派なことを繰返し叫んでも相手の心を打つものがなければ効果はない。」（『教育実習生

痴漢教育の戒め

知るといふ活動は大変なことである。やまとことばとしての「しる」といふ行為は、もともと治める（修める）行為を意味しており、儒学四書の一つである『大学』のなかに、「修身齊家治國平天下」という記述がある。一人ひとりが身を修めることによって天下社会の平和を達成することのできる段階秩序を述べたものであるが、その際、先ず身を修めることの重要性和その修め方が問題となってくるのである。天地自然の理をわきまえ、人としての道を体得して初めてわが身を治めることができ、自律の行為が可能となることを説いている。「認知」といふ心のはたらきは、ある事柄を体験的に知覚して納得し肯定する行為を示している。

しかし、今日の情報システムの発達と形成的思考操作に基づく情報伝達社会にあつては、身を以て体験する時間的空間的要因が稀薄となつてきて、単なる言語による抽象的知的理解あるいは映像的理解を「しる」行為と考へ、体験の乏しいまま「わかった」と錯覚していることが甚だ多い。すなわち、知り方がゆがんできているので「わかったつもり」でいるけど、殆どわかっていないことばかりであるから、歌の文句にあるように「わかつちやいるけど止められない」のである。

視聴覚教育でテレビを通してロンドン市街とテムス河を見て、英国の首都ロンドンを知つたつもりでいるし、新聞の活字を通して交通事故多発情報を知つたつもりでいるけれど、所詮それらは画餅であつて、ロンドンの街路や家並みから流れてくる乳臭さはテレビではわからないし、交通事故の痛ましさを、

酷さも伝わって来ない。

知識・技術の偏重は、相変らず更正されそうもない学歴社会が今日も続き、技術革新のみに目を奪われて便利さを追究する社会に生き、大半の人が高齢化社会に入ってから人間形成を忘れたことに気付き、淋しさにさいなまれるようになっては余りにも悲しい。知育偏重は「知り方が抽象的な屁理屈理論に片寄った状態」であるから、「病的な知り方Ⅱ学問」という時代である。病的な知り方は痴であり、知という字にヤマイダレがかかっている。そのような教育を痴漢教育ということができよう。痴漢は「頭のイカレテイル人」のことであり、知識や技術偏重の教育は、イカレテイル人を養成しているのであって、そら恐しいことである。人倫も操もあつたものではない。最近、九大名誉教授池見西次郎は数学者岡潔の言った「畜生道の教育」を警告しているが、私の言う痴漢教育もほぼこれに近い。

このことに関連して武田学長は、既に引用してきた『教育実習生へ』という要請文のなかで「教育意識の確立」という項を設け、次のように述べている。

「教師は児童の鏡である。すなわち、教師の児童に及ぼす影響は実に大である。教師の善い所も悪い所も総て相手（児童）に反映するものであるから、教師は相手より一段と知識も技能も人格も高くなくてはならぬことは当然である。従つて教師は常に自己を磨き、正しい教育信念に基づく高い人格をとおして児童を導き、純正なる教育理想実現のためにまい進せねばならぬ。」（括弧および傍点筆者）と戒めている。

生徒指導の重要性——診断と実践——

武田学長は同上文書において「教師の指導技術」の項を設け、「教師は前述のごとく、教育者としての確固たる信念のもとに、一つの筋金のおつたものが必要である。教師自身に筋金がおつておれば相手の児童にも筋金の入った人間ができる。次に教師は相手の児童をよく知ることが大切である。それには児童と接触する機会をできるだけ多くもって話合ひの場をつくることである。なお、運動、掃除、作業等を共にすることによって児童の個性、性格、能力、家庭環境等を、また、個人個人の長所、短所も知ることができ、これによって個々に応じた指導をして教育効果を挙げることができるのである。」と教師の信念と同時に生徒理解の必要性を強調している。

生徒指導は義務教育において教授・学習指導と同等あるいはそれ以上に重要な教育機能であつて、両者は車の両輪のような役割をもっている。今日ほどこれら両機能の調和をもつた指導と教師の力量の必要なのは、強調されても強調しすぎることはない。

生徒（児童）指導のテキストを見ると、「生徒理解」の重要な役割と機能が説かれているが、教師養成コースの学生たちは、「生徒理解」という教職専門用語の抽象的概念的な把握は可能であつても、その内容や方法についての理解と学習は、彼らにとって痛痒性がないから甚だ不十分と言わざるを得ない。それが「生徒指導」二単位習得の内容である。その理由は前項で論述したように、画餅としての生徒理解であり、知識や理論の断片に過ぎない。生徒指導の具体的事例をと教科書編集者が言いながら、

孫引きや新聞記事を引用しカッコイイ理念を論述しているに過ぎない。事例研究はそんな表面的なものではなく、事例をとおして児童・生徒の独特の心の機微に触れるものでなければ、指導方法は習得できるものではない。概念としての生徒理解について「知っている」「わかった」と思い、若干の抽象的内容だけを知っているに過ぎない。そして、知っているとは錯覚したら、もうそれ以上には生徒理解についての学習も実践もなされることはない。

現に教育指導の現場では、若い教師たちの大半は教壇に立って相手が教科内容を理解しようが無理解のまま授業が終了しようが、溢れた教科カリキュラムの洪水に押し流され、一応の提示説明に追われ、その内容の3割も消化していないで落ちこぼしそのまま本意ながら次の単元に進んでいる形跡が目につくように思われる。(平成3年11月、NHKテレビ討論)

従って生徒指導ないし生徒理解に関する教育実践は、お寒い限りと言わざるを得ないから、校内暴力・いじめ・不登校が続発しているのではあるまいか。このような現状は車の両輪には程遠く、両者を量的に表現すると、学習指導8割、生徒指導2割程度の実践で、質的な活動に至っては、教師の意識に止まっているだけで、例えば30人学級の生徒理解は甚だ困難で殆ど実践の効果があがらないのは、次のような理由によると思われる。

筆者は、学習指導・生徒指導・進路指導など様々な教育活動に共通した指導の定義として、「指導とは相手を知ること」に始まり、「相手が分った時に終る一連のプロセスである」と把握したい。相手を知

ることに際限がなく、少しでも知らうとする努力がすなわち指導であると考えることもできる。

診断 *diagnosis* という概念や術語は、医学における臨床診断、カウンセリングにおける心理診断などのように用いられている。身体や精神の疾病ないし心身症の治療などにおいては、先ず厳正・的確な診断がなされなければ有効な治療は望めない。診断の語源的意味は *dia* = 徹底して、完全に、*gnosis* 知るということで、医学においてはレントゲン、血沈、血圧、尿検査などの検査結果と問診によって可能な限り徹底して知る努力が行われる。心理療法やカウンセリングにおいても、言語を媒介とした面接法を中心に、投影法、質問紙法、性格検査、知能検査などを通し、長い時間と労力をかけて相手を直観的と同時に科学的に知る努力が続けられる。それが治療への始まりであり、適切な指導のための手段と同時に目的である。

教育現場において目前の子どもたちの認知能力、価値観、性格、欲求などを診断することは容易なことではない。長年の経験と直観も大切であるが、ハロー効果やピグマリオン効果などからも判明するようには、教師の理解には往々にして偏見や誤解が生まれ、それによって30人の子どもの中途半端な指導がなされて、看過されやすい風土がある点が恐しいのである。

3 教師観の三要素

筆者は、かつて教師像（教師観）について女子学生と小・中学校教員から採集した意見陳述statementを整理し、六五個にまとめたものを基にして態度測定を行うため、各意見の評定値を求めたことがある。今ここにそれらを再掲する紙幅はないが、代表的なものを例示すると、

- (1) 教師は手に負えない。
- (4) 一般に教師は偽善的であらねば強く頑固である。
- (9) 教師は口論に過ぎない。（本章で上掲）
- (17) 教師は時代に対し強度の順応性が少ない。
- (27) 教師は偏見的インテリゲンチヤである。などの否定的な見解から
- (38) 教師は人間であることを意識し、伸び伸びしなければならぬ。
- (39) 教師は創造しつつ伝達しなければならぬ責任者である。
- (42) 教師は絶えず人格と教養の向上が必要である。
- (44) 生徒の要求するものは研究的態度と教育愛である。
- (51) 教師は清純にして高尚な職業である。

(57) 被教育者の思想や性格を左右する。

(61) 教師は人間の探究心を満足させる。

(63) 教師は社会を聡明にする原動力である。

(65) 教師は何よりも必要なものである。

などの肯定的積極的意見（大体評定値の順に配列し、意見番号が付されている）までさまざまな意見が得られた。そしてこれらの意見が表明される根底（背景）には、どんな要因が働いているかについて因子分析法（R技法）を施した結果、

第一因子(E) 教師の職業としての理想像――

最高の芸術家であり創造者である。教師は清純にして高尚な職業。などが代表的意見。

第二因子(C) 教師の人間らしさの理想像――

上記(42)の意見や(61)の意見に代表される。

第三因子(A) 現実と理想の矛盾的存在。――

上記(63)の意見と同等な重みの「教師は案外現実的な人が多い」とか「自己の学術的研究なしに教師たるの資格はない」などの意見が含まれている。

第一因子(E)は educational spirit、教育愛の要因と解釈され、社会が第一に求めている重要な見解である。第二因子(C)は charactor、人品・品性の要因と解釈され、真の人間性を備え発揮できることが要請

される。第三因子(A)は ability として学識・能力・資格に関する要因と解釈され、これらは因子分析法という統計的処理に基づいて考察されたものであるから、現代社会は教師にたいして資格・能力にも増して教育愛と人間的品性・品格を求めており、武田学長の教師論の根底をなしているものと考えられる。

引用・参考文献

- (1) 武田ミキ 「教育実習生へ」プリント資料
- (2) 武田ミキ 「教職員と学生の皆さんへ」平成三年四月 (標題は付されていないが、記述内容に基いて仮題とした)プリント資料
- (3) 京都ホームラム講演集 新しい価値を求めて NHK出版 平成三年十一月
- (4) 松浦寛次 わが人生九十年 中国印刷 平成三年十二月 (非売品)
- (5) 小林利宣 新教育心理学図説 福村出版 一九八六年三月
- (6) 小林利宣 教育心理学——中学・高校教育課程 朝倉書店 一九八三年四月
- (7) 小林利宣 教師に対する意見の評定(第三報) 広島女子短期大学紀要六集 一九五五年
- (8) 小林利宣・倉田侃司編 生徒指導 ミネルヴァ書房 一九九二年四月

(小林利宣)